

鹿児島県酪農クラスター協議会

I はじめに

鹿児島県の酪農戸数は、平成19年度の353戸が、28年度には197戸と、10年間に44%と大きく減少している。他方、鹿児島県の乳牛飼養頭数は、平成19年度の18,400頭が、28年度には15,500頭と、10年間に16%の減少に留まっている。すなわち、1戸当たり乳牛飼養頭数が、平成19年度の52.1頭から28年度の78.7頭に増加しているのである。

個別の規模拡大では、乳牛飼養頭数の維持が難しくなっている。このことが、鹿児島県全体の出荷乳量の減少ということにつながるのである。

さらに、規模拡大に伴って、自給飼料生産が追いつかず、購入飼料依存が強まることになる。近年の輸入飼料価格の高止まりは、経営を圧迫することにもなる。

規模拡大に伴う労働力不足は、家族経営だけではなく、雇用の企業的经营にも当てはまる。すなわち、従業員の確保が難しい状況にある。

以上のように、鹿児島県の酪農は生乳生産量の確保が大きな課題となっているのである。

II 鹿児島県酪農クラスター協議会の目指すもの

鹿児島県酪農クラスター協議会の目標は、生乳生産量の確保（飼養頭数の維持、個体乳量のアップ）で、以下の4つの取組を推進しようとしている。

1. 自給飼料の拡大

飼料生産基盤の確保（耕種農家との連携、遊休農地の利用）

効率的な生産体系の確立

コントラクターの活用

2. 飼養規模の拡大

飼養管理の改善

育成牧場の有効活用（耐暑性のある未經産牛の導入、放牧場への預託による剛健な身経産牛の育成）

先端繁殖技術の活用（性判別精液の利用、和牛受精卵移植の推進）

3. 労働負担の軽減

省力化機械（搾乳ロボット、自動給餌機、餌押しロボット、糞尿スクレパー、哺乳ロボット等）の導入

ヘルパー組織の活用

4. 新規就農者の確保、担い手の育成

ヘルパー組織を研修の場として活用

情報提供、マッチング（行政、鹿児島県酪農業協同組合連合会（以下、県酪農協）による人員募集等）

Ⅲ 県酪農協による支援

北海道から妊娠牛で導入した場合、現在、着値 1 頭 100 万円を超える。それ故、最近では自家産が多い。また、県酪農協では、酪農家の後継牛を、北海道の大樹町、根室市にあるに牧場に、全酪連を通じて預託している。預託期間は 6 カ月～分娩前で、預託料金は 40 万円前後である。

雇用型の企業的経営の労働力不足に対しては、県酪農協が、ベトナムからの海外研修生を斡旋している。現在、寶代牧場も含めて 13 戸の酪農家が利用している。

なお、労働力不足に対しては、搾乳ロボットが注目されている。こちらについては、県内で、デラバルの搾乳ロボットが 5 台導入されている。また、コーンズの搾乳のロボットが 1 台建設中である。

新規参入の事例としては、ヘルパーから就農したケースがある。場所は湧水町である。就農に当たっては、県酪農協が、離農した酪農家の乳牛を斡旋している。

Ⅳ 寶代牧場の展開

寶代牧場の経営主の龍弥氏は、平成 12（2000）年に、20 歳で就農している。当時は、経産牛は 30 頭の規模であった。就農後、規模拡大し、平成 22（2010）年に畜舎を整備し、平成 27（2015）年に畜産クラスター事業を活用して、バンカーサイロ整備、ホイルローダー導入を行っている(写真 1、2)。



【写真 1 寶代牧場のバンカーサイロ】



【写真 2 寶代牧場のつなぎ牛舎】

龍弥氏は、鹿児島県の酪農家の中でも若手に属する。経産牛 80 頭と大規模な経営であるが、労働力は、龍弥氏と 2 名の雇用である。雇用の 1 名は、元ヘルパー要員であるが、現在は、寶代牧場でアルバイトしている。もう 1 名は、ベトナムからの海外研修生である。研修期間は 3 年間である。

なお、鹿児島県の酪農ヘルパー利用組合のヘルパーは 30 名で、8 地区に分れて活動している。利用農家は、130 戸である。

つなぎ牛舎で、本人と研修生が、朝夕 2 時間の搾乳作業を行っている。常勤雇用については、将来的に考慮している。また、龍弥氏の夫人は子供が小さいので、酪農の作業を手伝っていないが、少しずつ戦力になることが予想される。

また、平成 28 (2016) 年 4 月に、南九州市颯娃地区の酪農家 4 戸からなるコントラクター組織、農事組合法人南薩アグリサポート (以下、アグリサポートと略す) を設立し、代表理事を務めている。

平成 28 (2016) 年は、アグリサポートが、延べ面積 90ha のトウモロコシ 2 期作を行っている。収穫時期は、7~8 月と 11~12 月である。

寶代牧場の立地する地域は、大規模な園芸地帯であり、キャベツ、イモ、ニンジン、ダイコン、茶が栽培されている。茶以外の作目は、ローテーションになっており、キャベツの前作として、トウモロコシの栽培が行われているのである。それ故、堆肥は、園芸地帯に還元されることになる(写真 3)



【写真 3 寶代牧場の周囲に広がる畑地、茶畑】

V おわりに

前述のように、鹿児島県の酪農戸数は、急速に減少している。1 戸当たり乳牛飼養頭数が増加しているが、前者のスピードが後者のスピードを上回っており、乳牛飼養頭数は減少を続けている。それ故、出荷乳量の減少になっている。

また、酪農経営の規模拡大は、飼料生産面と家畜飼養面の労働の競合を引き起こしている。それ故、コントラクターの活用や、搾乳ロボット等の省力化機械の導入が課題となる。

そして、寶代牧場のような若手酪農経営の経営展開が、鹿児島県の酪農産業において重要になる。また、湧水町の事例のような新規参入の育成も大きな課題である。

(横溝 功)